

## 〈原著論文〉

# 八代集紀伊国の和歌について

金 田 圭 弘\*

On the Waka poems of Kinokuni from Hachidaisyu

(KANEDA Yoshihiro)

### 一、はじめに

『万葉集』の紀伊国和歌について村瀬憲夫氏は精緻に研究され、その成果を1995年に和泉書院から『紀伊万葉の研究』（和泉書院、1995年）として上梓された。しかしながらその後、『万葉集』以降の紀伊国の和歌について、いまだまとまった報告がなされていない。そこで本稿では『紀伊万葉の研究』に続くよう、中等教育などで和歌の学習教材として用いられる八代集を対象とした紀伊国の和歌についてまとめてみたいと思う。

なお、本稿では『紀伊万葉の研究』（「紀伊万葉概観」序）にならって、

- ① 紀伊の地で詠まれた歌
- ② （必ずしも紀伊国の地で詠まれたとは言い難いが）紀伊国の地が歌の素材として詠み込まれた歌
- ③ 歌の中に紀伊国の地名が詠み込まれていなくても、題詞等によって紀伊国での作と推定できる歌
- ④ 対象歌が一作品群のうちの一首として詠まれている場合で、その作品群内の他の歌によって、その作品群が紀伊国関係の歌であることが分かるような場合の歌に、加え今回さらに、
- ⑤ 他国と関係する地名と詠みこまれたため、紀伊国の地名ではないように思われるものの、注釈書や史料等から紀伊国の歌としたもの（例えば『古今和歌集』828番歌の妹背山や『新古今和歌集』1518番歌の「待乳山」など）
- ⑥ 紀伊国の地名とされるものの、他国の地名である可能性もあるもの（例えば『拾遺和歌集』749番歌の「音無の里」や『詞花和歌集』232番歌の「音無の滝」や『千載和歌集』879番歌の「吹飯の浦」や『新古今和歌集』1071番歌の「由良」など）

---

\* 附属和歌山高等学校・中学校教諭

〔キーワード〕 八代集、紀伊国、万葉集、地名、部立

- ⑦ 本稿で使用する『新編国歌大観』の底本文では他国となっているものの、他の本文や和歌資料などでは紀伊国となっているもの(例えば『後撰和歌集』742番歌の「初島」など)

の条件に該当する和歌を八代集の中から採取していくこととした。

さて村瀬氏は『紀伊万葉の研究』の中で、「万葉歌が、後の王朝和歌に比して、歌の詠まれた地の風土的環境の影響をきわめて強く受けて詠まれていることもまた確かなことである。犬養孝氏に代表される『万葉の風土』研究が重要な意味を持つ所以である。従って、紀伊万葉の歌々も、紀伊国の風土的環境の中で、その有形無形の影響をなんらかの形で受けながら詠まれたものであり、その意味では、他の地域での詠とは趣を異にする面を持っているものと考えられる」とされ、氏はそのような立場から『万葉集』の紀伊国の和歌について考察をされているが、本稿では八代集の紀伊国の和歌についてさまざまな角度から見ていくだけでなく、『万葉集』の紀伊国の和歌とも比較しながら、八代集の紀伊国の和歌について概観していこうと思う。

## 二、紀伊国八代集の歌一覧

紀伊国八代集の和歌について、「一、はじめに」で示した条件の和歌を次の「表Ⅰ」に勅撰集ごとにまとめておく。

本文は『新編国歌大観』を用い、稿者が私的に平仮名を漢字に改め、送り仮名を施した。

なお、「表Ⅰ」中の各項目について以下の通りに簡略を示しておく。

表中の番号はそれぞれ新編国歌大観の歌番号を表す。

地名に括弧が付いているものは題詞等に紀伊国地名があることを表す。

万……『万葉集』から登場する紀伊国の地名であることを表す。

(万)……『万葉集』から登場する紀伊国の地名で題詞等に記されていることを表す。

八……八代集から登場する紀伊国の地名であることを表す。

(八)……八代集から登場する紀伊国の地名で題詞等に記されていることを表す。

紀北……和歌山市、海南市、岩出市、紀の川市、橋本市、紀美野町、かつらぎ町、九度山町、高野町の各市町村を含む地域をさす。

紀中……有田市、有田川町、湯浅町、広川町、由良町、日高町、日高川町、美浜町、御坊市、印南町、みなべ町の各市町村を含む地域をさす。

紀南……田辺市・上富田町、白浜町、すさみ町、串本町、古座川町、那智勝浦町、太地町、新宮市、北山村の各市町村を含む地域をさす。

さらに、最後の欄には備考を設け、関連が深いと思われる事項を記載した。

## 「表 I」

## 古今和歌集

仮序	仮序古	和歌の浦	万	紀北 古注	和歌の浦に潮満ちくれば瀉を無み葦辺をさして鶴鳴き渡る 山辺赤人 万葉集924
272	秋下	吹上	八	紀北 詞・和歌	秋風の吹上に立てる白菊は花かあらぬか浪の寄するか 菅原道真(菅原朝臣) 寛平御時菊合8
828	恋五	妹背山 吉野川	万	紀北 和歌	流れては妹背の山の中に落つる吉野の川のよしや世の中 読み人知らず
912	雑上	玉津島	万	紀北 和歌	わたの原寄せくる浪のしばしばも見まくのほしき玉津島かも 読み人知らず

## 後撰和歌集

380	秋下	妹背山	万	紀北 和歌	君と我妹背の山も秋くれば色変はりぬる物にぞありける 読み人知らず
635	恋二	名草	万	紀北 和歌	跡見れば心なぐさの浜千鳥今は声こそ聞かまほしけれ 読み人知らず 参考：兼輔集65
742	恋二	初島 津国(紀伊国)	八	紀中/紀伊 和歌	あな恋しゆきてや見まし津の国の今も有りてふ浦の初島 戒仙法師 堀河本, 古今六帖1911: 紀伊国
768	恋三	玉津島	万	紀北 和歌	玉津島深き入り江を漕ぐ舟のうきたる恋も我はするかな 大友黒主(くろぬし)
1214	雑三	妹背山	万	紀北 和歌	むつまじき妹背の山の中にさへ隔つる雲の晴れずもあるかな 読み人知らず 参考：注釈書吉野川
1223	雑三	名草 紀伊国	万	紀北/紀伊 和歌	紀伊国の名草の浜は君なれや事の言ふかひ有りと聞きつる 読み人知らず
1255	雑四	待乳山	万	紀北 和歌	いつしかと待乳の山の桜花待ちてもよそに聞くがかなしき 読み人知らず

## 拾遺和歌集

526	雑下	岩代	万	紀中 和歌	我が事はえもいはしろの結松千とせをふとも誰か解くべき 曾禰好忠 天元四年故右衛門督藤原济敏君達謎合854
573	雑下	待乳山	万	紀北 和歌	……ふるさとに帰りや来ると待乳山待つほど過ぎて…… 読み人知らず 長歌
619	神楽歌	妹背山	万	紀北 和歌	おほなむちすくなみ神の作れりし妹背の山を見るぞうれしき 柿本人麻呂(人麿) 万葉集 1247(1251)
668	恋一	熊野	万	紀南 和歌	み熊野の浦の浜木綿百重なる心は思へどただに逢はぬかも 柿本人麻呂(柿本人麿) 万葉集 496(499) 参考：兼輔集68

742	恋二	岩代	万	紀中	何せむに結びそめけん岩代の松は久しき物と知る	
				和歌	読み人知らず (よみ人知らず)	参考: 拾遺526
749	恋二	音無の里	八	紀南	恋ひわびぬ音をだに泣かむ声立てていつこなるらん音無の里	
				和歌	読み人知らず	参考: 輔親集197
750	恋二	音無川	八	紀南	音無の川とぞつるに流れける言はで物思ふ人の涙は	
				和歌	清原元輔 (元輔)	
820	恋三	待乳山	万	紀北	来ぬ人を待乳の山の郭公同じ心に音こそ泣かるれ	
				和歌	読み人知らず (よみ人知らず)	
854	恋四	岩代	万	紀中	岩代の野中に立てる結び松心も解けず昔思へば	
				和歌	長意吉麿	重複 1256/ 万葉集 144 参考: 拾遺526本歌
890	恋四	熊野 (熊野)	万 (万)	紀南	さしなから人の心を見熊野の浦の浜木綿幾重なるらん	
				詞・和歌	平兼盛 (兼盛)	参考: 落窪物語二
1095	雑秋	妹背山	万	紀北	むつまじき妹背の山と知らねばや初秋霧の立ち隔つらん	
				和歌	読み人知らず (よみ人知らず)	曾禰好忠作?
1162	雑賀	千ひろの浜 紀伊国	八	紀中/紀伊	万世を数へむ物は紀の国の千ひろの浜の真砂なりけり	
				和歌	清原元輔	後拾遺445, 元輔集58
1256	雑恋	岩代	万	紀中	岩代の野中に立てる結び松心も解けず昔思へば	
				和歌	長意吉麿 (人麿)	重複854/ 万葉集144

後拾遺和歌集

序	序	熊野	万	紀南	おほよそ、このほかの歌、み熊野の浦の浜木綿世を重ねて、	
				序	藤原俊通	
445	賀	ちひろの浜 紀伊国	八	紀中/紀伊	万代をかぞへむものは紀の国のちひろの浜のまさごなりけり	
				和歌	清原元輔	拾遺集1162, 元輔集58
503	羈旅	(熊野)	(万)	(紀南)	旅の空よはの煙とのぼりなばあまの藻塩火たくかたや見ん	
				詞	花山天皇 (花山院御製)	栄花物語「見果てぬ夢」/大鏡「伊尹」 参考: 熊野詣
504	羈旅	吹上 (熊野)	八 (万)	紀北/(紀南)	都にて吹上の浜を人とはば今日みるばかりいかか語らん	
				詞・和歌	懐円法師	熊野詣
505	羈旅	熊野	(万)	(紀南)	山の端にさはるかこそ思ひしか峰にてもなほ月ぞ待たる	
				詞	少輔	参考: 父藤原兼房, 熊野詣
595	哀傷	(熊野) (難波)	(万)	(紀南)	いにしへにはのことも変はらねど涙のかかる旅はかなりき	
				詞	源信宗 (源信宗朝臣)	伊勢大輔集144 参考: 熊野詣
774	恋四	岩代	万	紀中	岩代のもりのいはじと思へどもしづくにぬる身をいかにせん	
				和歌	恵慶法師	恵慶法師集250
885	雑一	熊野 (熊野)	万 (万)	紀南	忘るなよ忘ると聞かばみ熊野の浦の浜木綿うらみかさねん	
				詞・和歌	道命阿闍梨 (道命法師)	道命阿闍梨集91 参考: 熊野詣
1049	雑四	岩代	万	紀中	岩代の尾上の風に年ふれど松のみどりはかはらざりけり	
				和歌	藤原資仲 (前大宰帥資仲)	永承四年内裏歌合2, 俊頼髓脳234
1064	雑四	(熊野) 住吉	(万)	(紀南)	住吉の浦風いたく吹きぬらし岸うつ波の声しきるなり	
				詞	兼経法師	参考: 熊野詣, 花山院御供
1068	雑四	(熊野) 住吉	(万)	(紀南)	ときかけつ衣の玉は住の江の神さびにける松のこずゑに	
				詞	増基法師	増基法師集2 参考: 熊野詣
1076	雑四	(音無川) (熊野)	(八) (万)	(紀南)	山がらすかしらも白くなりけり我が帰るべき時や来ぬらん	
				詞	増基法師	増基法師集19, 和歌童蒙抄791

1131	雑五	和歌の浦 (紀伊)	万	紀北/紀伊 和歌	老の波よせじと人はいとへども待つらんものを和歌の浦には 連敏法師	参考：紀伊守頼国
------	----	--------------	---	-------------	-------------------------------------	----------

## 金葉和歌集

26	春	糸鹿山	万	紀中 和歌	糸鹿山くる人もなき夕暮れに心細くも呼子鳥かな 前斎院尾張	
221	秋	妹背山	万	紀北 和歌	妹背山峰の風や寒むからん衣かりがね空に鳴くなり 藤原公実（春宮大夫公 実）	寛子扇歌合18
286	冬	岩代	万	紀中 和歌	岩代の結べる松にふる雪は春もとげずやあらんとすらむ 中納言女王	参考：拾遺854, 万葉144
378	恋上	岩代	万	紀中 和歌	かくとだにまだ岩代の結び松むすぼほれたる我が心かな 源顕国（源顕国朝臣）	
385	恋上	(熊野)	(万)	(紀南) 詞	夜もすから草の枕におく露は故郷こふる涙なりけり 藤原長実（大宰大貳長 実）	参考：白河院熊野行幸
493	恋下	熊野	万	紀南 和歌	み熊野に駒のつまづく青つづら君こそ我がほだしなりけれ	参考：「みかりする駒の」拾遺1264
510	恋下	玉津島	万	紀北 和歌	玉津島岸うつ波のたち返りせないでましぬなごり淋しも 藤原顕李（修理大夫顕李）	参考：万葉調
578	雑上	和歌の浦 (和歌の浦)	万 (万)	紀北/(紀北) 詞・和歌	人なみに心ばかりは立ちそひてさそはぬ和歌のうら見をぞする 藤原仲実（前中宮甲斐）	参考：紀伊守
587	雑上	(熊野)	(万)	(紀南) 詞	心こそ世をばすてしかまぼろしの姿も人に忘れにけり 行尊（僧正行尊）	参考：熊野詣
671	補遺	音無川	八	紀南 和歌	卯花を音無河の波かとしてねたくも折らで過ぎにけるかな 源盛清	補遺歌供
696	補遺	岩代	万	紀中 和歌	物をこそしのべば言はね岩代のもりにのみもる我が泪かな 源親房	補遺歌 参考：後拾遺774, 惠慶集 250

## 詞花和歌集

232	恋上	音無の滝	八	紀南 和歌	恋ひわびてひとり伏せ屋によもすから落つるなみだや音無の滝 藤原俊忠（中納言俊忠）	
269	恋下	熊野	万	紀南 和歌	いくかへりつらしと人を見熊野のうらめしながら恋しかるらむ 和泉式部	
283	雑上	和歌の浦 [美作/久米]	万	紀北 和歌	美作や久米のさら山と思へどもわかぬ浦とぞいふべかりける 俊子内親王の女房	
284	雑上	和歌の浦	万	紀北 和歌	和歌の浦といふにてしりぬ風ふかば波のたちことおもふなるべし 藤原長実（贈左大臣）	283の返歌/顕李長男
387	雑下	(熊野)	(万)	(紀南) 詞	都にてながめし月のもろともに旅の空にもいでにけるかな 道命阿闍梨（道命法師）	参考：熊野詣

## 千載和歌集

序	序	和歌の浦	万	紀北 序	和歌の浦の道にたづさひては七十の潮にもすぎ 藤原俊成	
---	---	------	---	---------	-------------------------------	--

487	別離	(熊野)	(万)	(紀南) 詞	もろともに行く人もなき別れ路に涙ばかりぞとまらざりける 道命阿闍梨(道命法師)	参考:熊野詣
517	羈旅	(高野山)	(八)	(紀北) 詞	定めなき憂き世の中と知りぬればいづくも旅の心地こそすれ 覚法(高野法親王覚法)	参考:高野詣
879	恋四	吹飯の浦	万	紀北 和歌	待ちかねてさ夜も吹飯の浦風に頼めぬ波の音のみぞする 二条院内侍参河	参考:注釈書和泉
990	雑上	吹飯の浦	万	紀北 和歌	小夜千鳥吹飯の浦におとづれて絵鳥が磯に月かたぶきぬ 藤原家基	参考:注釈書和泉, 不詳歌会
1051	雑上	和歌の浦 (和歌の浦)	万 (万)	紀北/(紀北) 詞・和歌	ゆく年は浪とともにやかへるらん面変はりせぬ和歌の浦かな 祝部成仲(祝部宿禰成仲)	参考:教長家二十五名所歌会歌?
1107	雑中	(高野山)	(八)	(紀北) 詞・和歌	跡たえて世をのがるべき道なれや岩さへ苔の衣着てけり 守覚(仁和寺法親王守覚)	参考:高野詣
1132	雑中	(熊野) (金峯山/大峰)	(万)	(紀南)/(国外) 詞	おしからぬ命ぞさらに惜しまるる君が都にかへりくるまで 藤原成通(前大納言成通)	参考:熊野詣, 金峰山, 源平盛衰記三, 玉葉治承四年八月
1135	雑中	(高野山)	(八)	(紀北) 詞	たれもみな露の身ぞかしと思ふにも心とまりし草の庵かな 藤原実国(権大納言実国)	参考:高野詣, 奥の院
1160	雑下	熊野	万	紀南 長歌	……世の中にまた何事をみ熊野の浜木綿重ねつつ憂きに堪えたる…… 源俊頼(源俊頼朝臣)	堀河院百首1576
1163	雑下	名草	万	紀北 長歌	……頼むにも名草の浜のなぐさみて…… 待賢門院堀河(待賢門院の堀河)	崇徳院百首
1220	釈教	(高野山)	(八)	(紀北) 詞	降る雪は谷のとほそをうつむとも三世の仏の日や照らすらん 崇徳天皇(崇徳院御製)	参考:高野詣(修行)
1221	釈教	(高野山)	(八)	(紀北) 返歌	照らすなる三世の朝日には降る雪よりも罪や消ゆらん 覚性(仁和寺後入道法親王覚性)	1220の返歌
1236	釈教	高野山 (高野山)	八 (八)	紀北/(紀北) 詞・和歌	あか月を高野の山に待つほどや苔の下にも有明の月 寂蓮(寂蓮法師)	参考:高野詣
1258	神祇	塩屋 (熊野)	八 (万)	紀中/(紀北) 詞・和歌	思ふ事汲みて叶ふる神なれば塩屋に跡垂るるなりけり 藤原公教(後三条内大臣)	参考:白河院熊野行幸, 新古今1909同時期歌?
1268	神祇	(発心門) (熊野)	(八) (万)	(紀南) 詞・和歌	うれしくも神の誓ひをしるべにて心をおこす門に入りぬる 藤原経房(権中納言経房)	参考:熊野詣
1278	神祇	(高野山) (二見浦/霊鷲山)	(八)	(紀北)/(国外) 詞・和歌	深く入りて神路の奥を尋ぬればまたうゑもなき峰の松風 西行(円位法師)	参考:高野から伊勢へ移住

新古今和歌集

仮序	仮序	和歌の浦	万	紀北 仮名序	……よもの海、秋津島の月しづかにすみて、和歌の浦の跡をたづね、 藤原良経	仮名序
336	秋上	待乳山	万	紀北	たれをかも待乳の山のをみなへし秋とちぎれる人ぞあるらし 小野小町	小町集98, 八雲御抄三 大和国:和歌初学抄
646	冬	吹上	万	紀北 和歌	浦風にふきあげの浜のまち千鳥たちくらし夜はになくなり 紀伊(祐子内親王家紀伊)	堀河院百首991

647	冬	吹上	万	紀北 和歌	月ぞすむたれかはここにきの国や吹上の千鳥ひとりなくなり 藤原良経(摂政太政大臣) 老若五十首歌合346
671	冬	佐野	万	紀南 和歌	駒とめて袖打ち払ふかげもなし佐野の渡りの雪の夕暮れ 藤原定家(定家朝臣) 正治二年院初度百首1370
741	賀	和歌の浦	万	紀北 和歌	もしほ草かくともつきじ君が代のかずによみおく和歌の浦浪 源家長 和歌所闔
836	哀傷	(高野)	(八)	(紀北) 詞	たづね来ていかにあはれとながむらんあとなき山の峰の白雲 寂蓮(寂蓮法師) 寂蓮法師集228 参考:頼輔集, 教長高野山
947	羈旅	岩代	万	紀中 和歌	ゆく末はいまいく夜とか岩代の岡のかや根に枕結ばん 式子内親王 正治二年院初度百首287
989	羈旅	(熊野)	(万)	(紀南) 詞	見るままに山風あらくしぐるめり都もいまや夜寒むなるらむ 後鳥羽天皇(太上天皇) 参考:後鳥羽院熊野行幸
1048	恋一	熊野	万	紀南 和歌	み熊野の浦より遠ちに漕ぐ舟の我をばよそに隔てつるかな 伊勢 伊勢集380, 古今六帖1888
1071	恋一	由良	万	紀中 和歌	由良の門を渡る舟人かちをたえゆくゑもしらぬ恋の道かも 曾禰好忠 好忠集410 参考:紀伊国:八雲御抄五, 丹後:契沖
1073	恋一	由良	万	紀中 和歌	かちをたえ由良のみなどによる舟のたよりもしらぬ沖つ潮風 藤原良経(摂政太政大臣) 正治二年院初度百首477
1075	恋一	由良 /紀伊	万	紀中/紀伊 和歌	紀の国や由良のみなどに拾ふてふたまさかにだに逢ひ見てしかな 藤原長方(権中納言長方) 長方集138
1078	恋一	名草	万	紀北 和歌	海人の刈るみるめを浪にまがへつつ名草の浜をたづねわびぬる 藤原俊成(皇太后宮大夫俊成) 長秋詠藻344
1197	恋三	待乳山	万	紀北 和歌	たのめずは人を待乳の山なりとねなまし物をいざよひの月 後鳥羽天皇(太上天皇) 参考:新大系脚注大和国, 和歌初学抄
1506	雑上	和歌の浦	万	紀北 和歌	和歌の浦にいゑの風こそなけれども浪ふく色は月に見えけり 藤原範光(民部卿範光) 和歌所御会月前風建仁二年八月十五日
1518	雑上	待乳山 〔大和国〕	万	紀北 和歌	たのめこし人を待乳の山風にさ夜ふけしかば月も入りき よみ人しらず 詞書:大和国 参考:能宣集?
1524	雑上	(熊野)	(万)	(紀南) 詞	奥山の木の葉の落つる秋風にたえだえ峰の雲ぞのこれる 藤原秀能 如願法師集532 参考:熊野詣
1556	雑上	和歌の浦	万	紀北 和歌	和歌の浦に月の出で潮のさすままに夜なく鶴の声ぞかなしき 慈円(前大僧正慈円) 和歌所建永元年七月二十五日卿相侍臣歌合
1559	雑上	(切目) (熊野)	(八) (万)	紀中/紀南 詞	ながめよと思はでしもや帰るらん月まつ浪の海人の釣舟 源具親(具親) 正治二年切目王子和歌会
1588	雑中	(紀伊国)	(万)	(紀伊国) 詞	白浪の浜松が枝のたむけぐさいく代までにか年の経ぬらん 川島皇子(河島皇子) 万葉集34 参考:紀伊国行幸
1603	雑中	和歌の浦	万	紀北 和歌	和歌の浦を松の葉ごしにながむれば梢によする海人の釣舟 寂蓮(寂蓮法師) 寂蓮法師集193
1609	雑中	吹上	万	紀北 和歌	うちよする浪の声にてしるきかな吹上の浜の秋の初風 祝部成仲 正治二年院後度百首
1662	雑中	音無川 (熊野)	八 (万)	紀南/(紀南) 詞・和歌	わくばらになどかは人の間はざらん音無川に住む身なりとも 行尊(大僧正行尊) 行尊大僧正集200 参考:熊野詣
1663	雑中	(熊野)	(万)	(紀南) 詞	世をそむく山のみなみの松風に苔の衣や夜寒むなるらん 安法法師 安法法師集41 参考:僧のみなみ山にこもり

1723	雑下	吹飯の浦	万	紀北	あまつ風吹飯の浦にゐる鶴のなどか雲井に帰らざるべき	
				和歌	藤原清正	和漢朗詠集453, 清正集89, 忠見集143 参考: 新大系脚注紀伊国
1761	雑下	和歌の浦	万	紀北	和歌の浦や沖つ潮合に浮かび出づるあはれわが身のよるべ知らせよ	
				和歌	藤原家隆	壬二集3036
1813	雑下	(熊野) (大峰)	(万)	(紀南)	あはれとてはくぐみ立てしいにしへは世をそむけとも思はざりけん	
				詞	行尊(大僧正行尊)	行尊大僧正集83 参考: 熊野詣
1844	雑下	(熊野)	(万)	(紀南)	末の世もこのなさけのみ変わらずと見し夢なくはよそに聞かまし	
				詞	西行(西行法師)	参考: 熊野詣
1858	神祇	(熊野)	(万)	(紀南)	人知れず今や今やとちはやぶる神さぶまで君をこそまで	
				左注	春日大社	参考: 熊野詣
1859	神祇	(熊野)	(万)	(紀南)	道遠しほどもはるかにへだてたり思ひを起こせよ我も忘れじ	
				左注	熊野権現	袋草紙二 参考: 熊野詣
1860	神祇	(熊野)	(万)	(紀南)	思こと身にあまるまでなる滝のしばしよどむを何恨むらん	
				左注	熊野権現	八雲御抄五
1906	神祇	(熊野)	(万)	(紀南)	咲きにほふ花のけしきを見るからに神の心ぞそらにしらるる	
				詞	白河天皇(白河院御製)	愚管抄 参考: 熊野行幸
1907	神祇	熊野 (熊野)	万 (万)	紀南/(紀南)	岩にむす苔ふみならず熊野の山のかひある行くすゑもがな	
				詞・和歌	後鳥羽天皇(太上天皇)	八雲御抄四 参考: 熊野行幸
1908	神祇	[熊野川] 新宮	八 (万)	紀南/(紀南)	熊野川くだす早瀬のみなれぎをさすがみなれぬ浪のかよひ路	
				詞・和歌		八雲御抄三 参考: 熊野詣
1909	神祇	塩屋 熊野	八 (万)	(紀南/紀中)	たちのぼる塩屋のけぶり浦風になびくを神の心ともがな	
				和歌	藤原実能(徳大寺左大臣)	参考 白河院熊野行幸, 千載集1258同期歌?
1910	神祇	岩代 (熊野)	万 (万)	紀中/紀南	岩代の神はしるらんしるべせよたのむ憂き世の夢の行くすゑ	
				詞・和歌	よみ人しらず	
1911	神祇	(熊野本宮)	(八) (万)	紀南	契りあればうれしきかかるをりにあひぬ忘るな神も行くすゑの空	
				詞	後鳥羽天皇(太上天皇)	参考: 建永元年熊野行幸

### 三、紀伊国八代集歌と紀伊万葉の歌との比較

次に「図A」で「表I」を元に、『万葉集』とそれぞれの勅撰集内での紀伊国和歌の割合を示した。数字はパーセントを示す。分母は底本としている『新編国歌大観』のそれぞれの勅撰集の歌数を用いている。

『古今和歌集』『仮名序』古注に登場する「和歌の浦」は、山部赤人の『万葉集』924番歌ではあるが、藤原公任が注釈として施したとされるため含めなかった。

『万葉集』から『古今和歌集』で紀伊国和歌が大幅に減少しているのは、京が奈良から京都の平安京に遷都したことで、紀伊国が京から遠くなってしまい、人の往来も減り、平安京の人々にとって身近な近隣の国として感じられなくなったことによるものなのかもしれない。

しかしながら、『万葉集』では詠まれなかった「吹上」が『古今和歌集』に詠まれ、後に『うつほ物語』の舞台になるなどしていることから一概に紀伊国と平安京との交流が希薄に

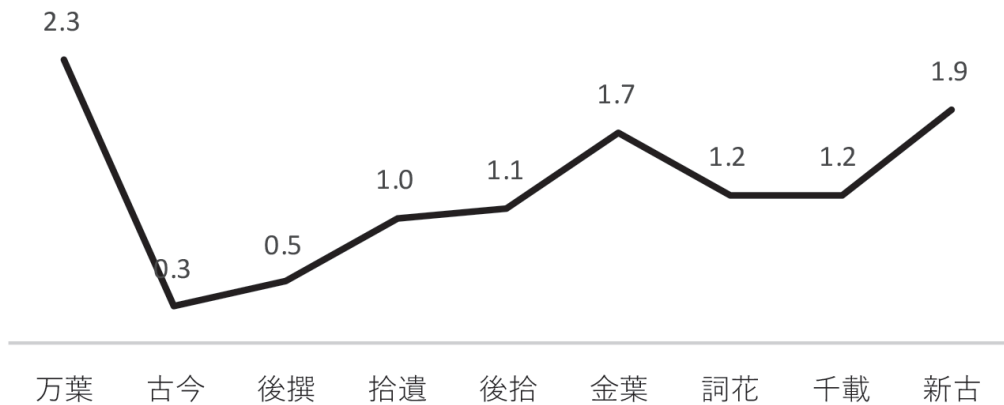


なったとは言い難いであろう。

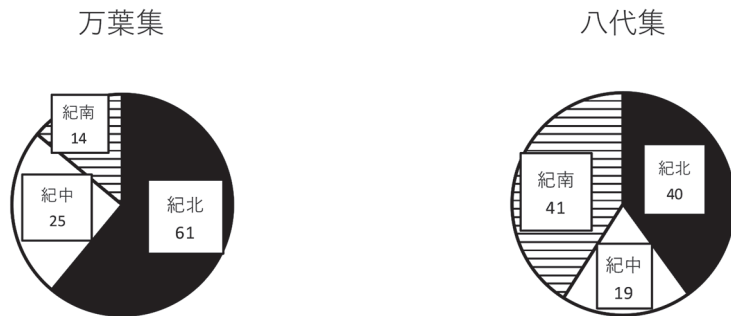
『拾遺和歌集』から紀伊国和歌が増加傾向に転じているが、そのことについては、他の資料を参照しながら後ほど考えてみたい。

次に「図B」では、『万葉集』と八代集全体の紀伊国和歌をそれぞれ紀北・紀中・紀南の地域別に分け、その割合を『万葉集』と八代集全体とで比較してみた。

図A



図B



『万葉集』では奈良から紀北地域が近いためか、やはり紀北地域の和歌の割合が大きくなっている。八代集では紀南地域の和歌が『万葉集』と比べその割合が大きくなってきている。その理由については『拾遺和歌集』から紀南地域の和歌が増えていることと関係がありそうなの

で、後の資料と照らし合わせながら考えたい。紀中地域の和歌については『万葉集』と八代集全体とでは大きな変化はないといえよう。

ではさらに紀北・紀中・紀南の各地域で、具体的にどのような地名が和歌に詠まれたのか。「表Ⅱ」にまとめてみた。数字は詞書を含んだ歌数を示している。

八代集に登場する地名を基準にしたため、『万葉集』にあって八代集にない地名は、「その他」とした。

「表Ⅱ」

紀北				紀中				紀南			
	地名	万葉集	八代集		地名	万葉集	八代集		地名	万葉集	八代集
1	待乳山	8	6	1	初島	0	1	1	熊野	4	36
2	高野山	0	8	2	糸鹿山	1	1	2	熊野川	0	1
3	妹背山	17	6	3	由良	3	3	3	熊野本宮	0	1
4	吹上	0	5	4	塩屋	0	1	4	音無	0	6
5	吹飯浦	0	3	5	切目	1	1	5	発心門	0	1
6	名草	1	4	6	岩代	6	11	6	新宮	0	1
7	玉津島	10	4	7	千尋の浜	0	2	7	佐野	1	1
8	和歌の浦	4	11	8	その他	11	0	8	その他	8	0
9	その他	15	0		計	22	20		計	13	47
	計	55	47								

紀北地域で『万葉集』と八代集とで大きな差が見られるのは「妹背山」と「玉津島」・「和歌の浦」である。

「妹背山」が『万葉集』で多いのは、「妹背山」が大化の改新の詔で畿内の南限と定められ、「妹背山」を越えると南海道に入るため、境界を意識する山として和歌に詠まれたからであろう。

「妹背山」と同じく境界を意識する山として紀伊と大和の国境に位置する「待乳山」も和歌に詠まれているが、724年の聖武天皇による玉津島行幸で笠金村が、

後れ居て恋ひつつあらずは紀伊の国の妹背の山にあらましものを

(『万葉集』544番歌)

と詠んだことにより、広く浸透し有名な存在となったのであろう。<sup>注1</sup>

八代集での「妹背山」は『古今和歌集』828番歌以降男女の仲を象徴するものや紅葉の名所<sup>注2</sup>となったものの『万葉集』での「妹背山」が持つ意味が変化したためか和歌に詠まれる機会も『万葉集』ほどでもなかったのかもしれない。

一方「妹背山」と同様、境界に位置する「待乳山」について、『後撰和歌集』1255番歌、『拾遺和歌集』573、820番歌等、八代集中すべての「待乳山」和歌が「待つ」の言葉と掛けられており、レトリックを好む傾向にある平安京の歌人たちが引き続いて詠んだのだと思われる。

「玉津島」と「和歌の浦」は同じ所にありながら、『万葉集』と八代集とで逆転したのは「和歌の浦」の「わか」という言葉の響きが「和歌」を連想させ、以降「和歌の聖地」として広まったからだと思われる。<sup>注3</sup>

紀中地域では数こそほぼ同じではあるが、『万葉集』の「その他」の内訳は、足白・安太・小為手乃山・阿古根能浦・鹿嶋・白崎・三名部乃浦・野島が各1首、三穂3首と分散しているのに対して、八代集では「岩代」に集中している。

「岩代」は有間皇子が、

磐代の浜松が枝を引き結び真さくあらばまた還り見む

(『万葉集』141番歌)

と、詠んで以来紀伊国歌枕の一つとなったが、八代集でも『拾遺和歌集』742番歌や『金葉和歌集』378番歌のように「松」、「結ぶ」などを詠んで有間皇子の和歌を彷彿とさせる和歌があるものの、『拾遺和歌集』526番歌のように「結」・「松」も和歌に詠み込みつつ、「岩代」の「岩」と「言は」を掛けて詠むようもなり、平安期以降も「岩代」は多く詠まれることになった。

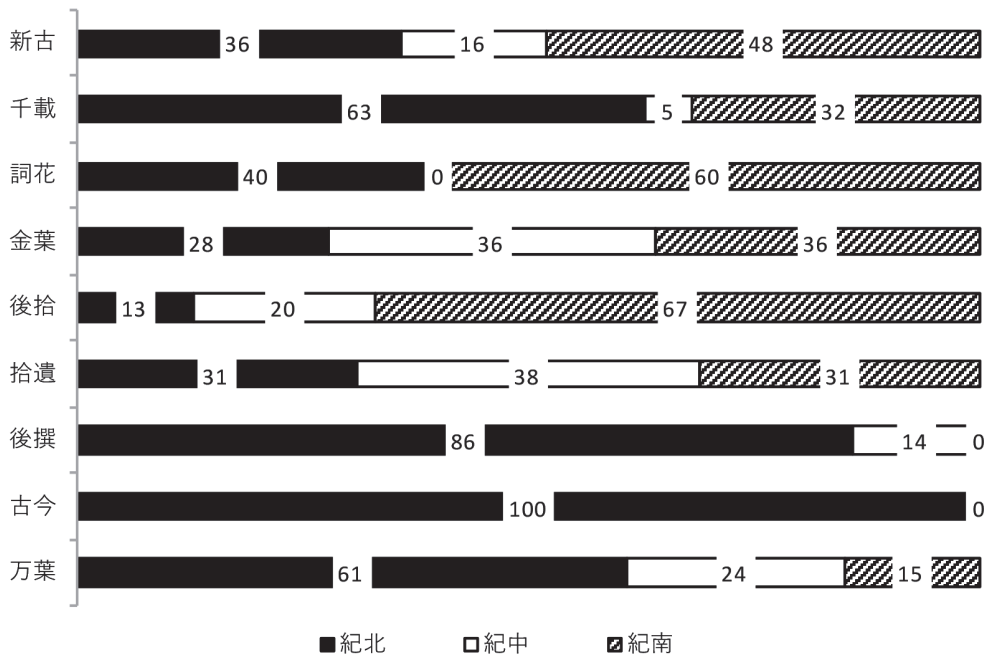
最後に紀南地域の和歌にふれたいが、八代集の紀南和歌群が『万葉集』の紀南和歌群よりも倍以上に増加している点、特に「熊野」の和歌が激増していることから、紀北・紀中・紀南それぞれの地域で詠まれた『万葉集』の紀伊国歌と各勅撰集の紀伊国歌の割合を示した「図C」を参照しながら詳しく見ていきたいと思う。

「図C」から、『後拾遺和歌集』で紀南地域の和歌が実に半数以上に及んでいることがわかるが、そのすべてが熊野詣と関係する和歌となっている。

熊野詣は院政期、特に白河院から後鳥羽院の時代に盛んに行われるようになった。『後拾遺和歌集』の勅撰を下命したのは白河院であったことから、編者よりも白河院の意向が反映された結果、熊野の和歌が多く入集したのであろう。

『拾遺和歌集』以前の勅撰集をみると『古今和歌集』、『後撰和歌集』では紀南地域の和歌は

図C



みられないが、『拾遺和歌集』から紀南地域の和歌が登場してくる。熊野詣との関連でいえば668番歌、890番歌であるが、749番歌の「音無の里」や750番歌の「音無の川」に注意が必要であろう。

「音無の川」とは平安中期の僧侶増基が熊野本宮での修行を終え京に帰ろうとした『後拾遺和歌集』1076番歌の詞書（熊野に参りて、明日出でなんとし侍りけるに、人々しばしは候ひなんや神も許したまはじなどいひ侍りけるほどに、音無川のほとりに頭白き鳥の侍りければ詠める）にもあるが、かつて熊野本宮大社があった熊野川の中州近くで熊野川に合流していた川のこと、水害のため高台に移転した現在の本殿の西側を今も流れ続けている。

ちなみに『拾遺和歌集』749番歌・750番歌ともに「恋」部に収められ、750番歌の作者が清原元輔であることなどから現地詠でないことは確か、で、「おとなし」の音の響きから「音がしない」場所のイメージを持つ地として詠み込まれている。紀伊国ではないとの議論もあるが、実際に音無川は存在し和歌にも詠まれていることから、熊野詣が広まるにつれ、平安中期以降に多くの人々にも知られた所になったのであろう。

一般的には蟻の熊野詣として院政期から鎌倉時代の初めにかけての熊野詣が有名だが、平安

時代中頃には宇多院が早く熊野詣をしており、馬淵和夫氏によると、「源為憲が冷泉天皇第二皇女尊子内親王のために著作し、永観2（984）年の冬に内親王に奉った<sup>注4</sup>」とされる『三宝絵』に熊野詣の様子が描かれており、『三宝絵』を贈られた尊子内親王の同母弟である花山院も熊野の地を訪れている。『後拾遺和歌集』503番に花山院が熊野詣の途中に詠んだ和歌が収められ、『栄花物語』や『大鏡』にはその様子が著されている。

以上のことから、平安中期には既に熊野詣は盛んに行われており、本宮大社に隣接する「音無川」の名も京の人々に知れ渡っていたのかもしれない。

ともかく紀南地域の和歌が増加した背景には熊野詣との関係が深いと指摘できよう。

最後に紀伊国和歌の部立についてまずは『万葉集』と八代集全体とでその割合を「図D」で示し、「図E」で『万葉集』とそれぞれの勅撰集内での紀伊国和歌の部立の割合を示して、紀伊国和歌が各勅撰集内でどのように分類されているのか具体的に見てみたいと思う。

なお、『万葉集』には「四季」の部立がないが「四季」の項目は設ける。さらに『万葉集』の「相聞」は「恋」に、八代集には「挽歌」はないが「哀傷」があるので、「挽歌・哀傷」とした。

「図D」

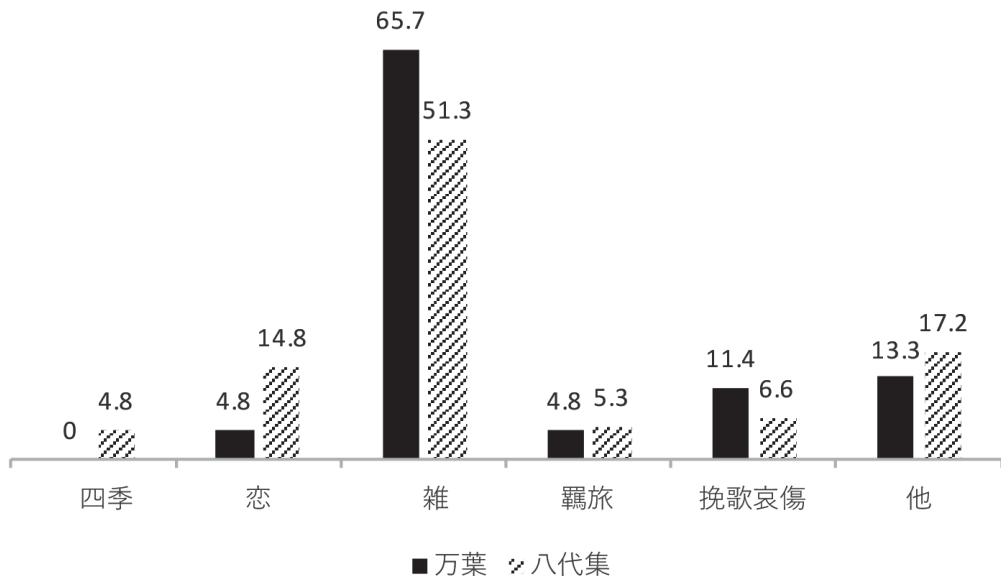
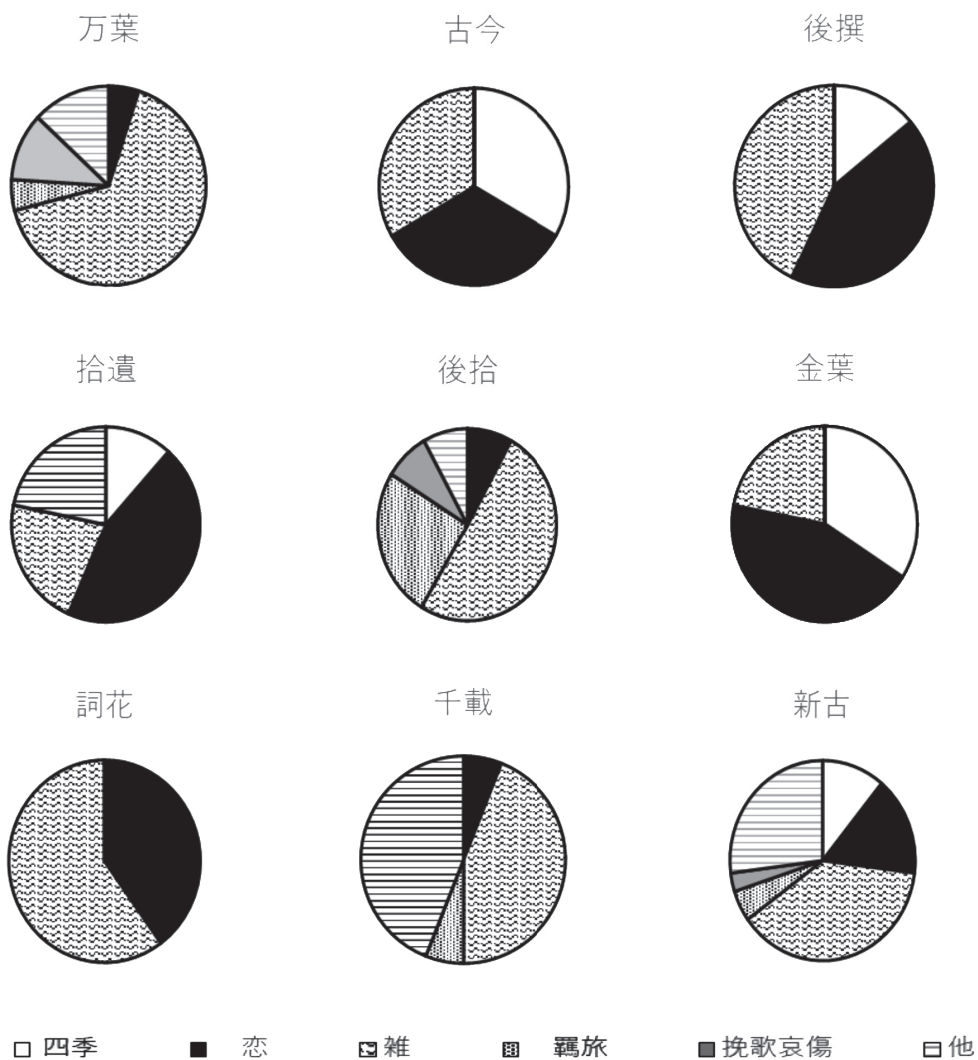


図 E



『万葉集』を含むすべての勅撰和歌集で「雑」の比率が高いことがわかる。紀伊国和歌の特徴として「雑」の和歌が多いことは分かるが、その理由についてはこれまでの資料を振り返ってみてもはっきりとしたことは分からない。

『万葉集』と八代集との比較では「四季」は言うまでもないが、『恋』に大きな差が見られる。『万葉集』の紀伊国和歌の特色として村瀬憲夫氏は「旅」が多いと指摘されていたが八代集の紀伊国和歌としての特色は逆に多岐にわたり、時代ごとに多様な面を見せているといえる

のかもしれない。

#### 四、まとめ

八代集の紀伊国和歌について、『万葉集』と比較しながら見てきたが、やはり時代によって変化するとせざるを得ない。

例えば、「表Ⅱ」の「高野山」は『千載和歌集』にのみ確認できる地名であり、熊野の和歌が増えていったのも熊野詣による影響であるといえよう。

私撰集と勅撰集との違いも「図E」から少なくとも読み取れるのかもしれない。

八代集の紀伊国和歌は特に掛詞や縁語といった修辞をともなって歌枕として成立し多くの和歌で詠まれたところに特徴があるのではなかろうか。

#### 注

- 1) 村瀬氏は「笠金村と紀伊」（『紀伊万葉の研究』和泉書院、1995年、p44）で「紀伊行幸という晴の場で、妹山が詠まれたことの意味と大きい。行幸といった公の華やかな場で公認されたことによって、妹山は一気に人々の間に広く定着していったもの」とされる。
- 2) 例えば、『源道濟集』200番歌に「妹背山。旅人、紅葉を見る 妹背山旅人紅葉ば紅の袖ふりかはし行くかとぞ見る」などがある。
- 3) 和歌の浦が和歌の聖地となったことは、拙著『和歌の浦の誕生 古典文学と玉津島社』（清文堂・2016年、222p）の「衣通姫とその神性（p119～p140）」、村瀬憲夫氏「神代よりしかぞ尊き玉津島山（3p）」、三木雅博氏「藤原公任の和歌の浦訪問をめぐる（p95～p118）」等で、詳しく述べられている。
- 4) 馬淵氏は「解説」（『新日本古典文学大系31三宝絵 注好選』岩波書店・1997年、p490）で、「内親王の信仰生活を励ますために」書いたとされる。

#### 引用資料・引用文献

『新編国歌大観 第1巻勅撰集編 歌集』角川書店、1983年、p9～p258

『新編国歌大観 第7巻私家集編Ⅲ 歌集』角川書店、1989年、p80

馬淵和夫「三宝絵解説」『新日本古典文学大系31 三宝絵 注好選』岩波書店、1997年、p490

村瀬憲夫「紀伊万葉概観」『研究叢書一五八 紀伊万葉の研究』和泉書院、1995年、p1～p20

**参考資料・参考文献**

- 『新日本古典文学大系 5 古今和歌集』岩波書店，1989年，526p
- 『新日本古典文学大系 6 後撰和歌集』岩波書店，1990年，526p
- 『新日本古典文学大系 7 拾遺和歌集』岩波書店，1990年，558p
- 『新日本古典文学大系 8 後拾遺和歌集』岩波書店，1994年，554p
- 『新日本古典文学大系 9 金葉和歌集 詞花和歌集』岩波書店，1989年，520p
- 『新日本古典文学大系 10 千載和歌集』岩波書店，1993年，516p
- 『新日本古典文学大系 11 新古今和歌集』岩波書店，1992年，704p
- 『新日本古典文学大系別巻 八代集総索引』岩波書店，1995年，514p
- 『新編国歌大観 第1巻勅撰集編索引』角川書店，1983年，918p
- 『新編国歌大観 第2巻私撰集編 歌集』角川書店，1984年，p7～p179
- 片桐洋一『歌枕歌ことば辞典増訂版』笠間書院，1999年，598p
- 村瀬憲夫『研究叢書一五八 紀伊万葉の研究』和泉書院，1995年，288p
- 村瀬憲夫・三木雅博・金田圭弘『和歌の浦の誕生 古典文学と玉津島社』清文堂，2016年，  
222p